

児童期における死と生の理解に関する研究の展望： 発達的变化および関連する要因について

大井, 妙子
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/20080>

出版情報：九州大学心理学研究. 12, pp.87-95, 2011-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



児童期における死と生の理解に関する研究の展望 —— 発達的变化および関連する要因について ——

大井 妙子 九州大学大学院人間環境学府

Review on understanding of death and life in childhood: Development and factors

Taeko Ohi (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

This paper reviewed the studies on understanding of death and life in childhood, on the basis of the arrangement, new viewpoints for the course of researches in the future were given. First, the knowledge of development of understanding of death and life was arranged every subject such as the concept of death, concepts of animated beings and living beings, emotions and images about death and life, and attitudes toward death and life. Second, the knowledge of factors in relation to understanding of death and life was put in order every subject such as gender difference, self-esteem and development of ego, personality, individual experiences, and cultural and religious backgrounds. Finally, the following viewpoints for the future researches were proposed: (1) to understand death and life as the construction of cognitional, emotional, behavioral sides and of ranging over consciousness to unconsciousness, (2) to turn our attention to “*inochi*” which means life in Japanese, (3) to examine the relations between understanding of death and life and various factors inclusively (especially for self-esteem, empathy, and aggression).

Key Words: understanding of death and life, development, factors

I 児童期における死と生の理解を 明らかにすることの意義

1. 近年の社会状況に見られるニーズ

子どもが死と生のテーマに触れる機会としては、事故や病気といった自身の生命が脅かされる体験、ペットや祖父母といった身近な存在との死別、ニュースで伝えられる第三者の死などが挙げられる。また、最近では、子どもによる自殺や殺傷事件に、特に注目が集まっている。未成年の自殺が全年齢に占める割合は約 1.7%と相対的に低く（警察庁, 2010a）、少年による刑法犯の検挙数も減少している（警察庁, 2010b）。しかし、社会に与える衝撃は非常に大きく、そういった問題が生起するたびに、命を大切に教育の必要性が叫ばれている（例えば、文部科学省, 2004）。命を大切に教育に関しては、従来から、学校の教育活動全体を通して、生命尊重の態度を養うことを目指した実践が積み重ねられてきた。さらに、昨今では、死への準備教育（death education）（デーケン, 1986）、いのちの教育（近藤, 2003）、生と死の教育（兵庫・生と死を考える会, 2007）といった新たな文脈の下での展開も見られる。こうした実践にあたっては、子どもが死と生をどのように理解しているのか、また、どのような要因が関連しているのかについて、基礎的な知見を整理しておく必要があると思われる。

2. 本研究で概観する学問領域と発達段階の範囲

死に関する学問はサナトロジー（thanatology）と呼ばれ、“死に関わりのあるテーマに対して学際的に取り組む学問”（デーケン, 1996）と定義される。日本では「死生学」と訳されることが多く、島園（2008）が“死との関わりにおいて理解されるような生命観の局面、また、「いのち」の尊厳にかかわるような生命観の局面は、死生学の対象に含まれることになる”と述べるように、欧米よりも広い範囲のテーマを扱うことが指摘されている。平山（2000）は、死の研究を進める際には、どの人称の立場を取るかが重要であり、明確にしておく必要があることを論じている。一人称として死を扱う立場では、死に直面する当事者の主体性、死に方、生き方が問題になる。次に、二人称として死を扱う立場では、死を「われ」と「なんじ」の関係において捉えようとする。最後に、三人称の死を扱う立場では、死や死にゆく者はたんなる「もの」にすぎず、客観的に分析すべき対象にすぎないという。平山（1991, 2000）を参考にすれば、各々の立場から死を扱う学問は Fig.1 のように整理される。ただし実際には、一つの学問が死の三つの人称全てを扱うこともあるため、その学問が主に扱う死の人称であることに留意する必要があるだろう。本研究は、心理学の知見を中心に論じるため、二人称の死を多く扱うことになるだろうが、一人称の死、三人称の死という視点も含めることにしたい。

ところで、児童期は Erikson（1959 / 1973）のライフ

サイクル理論によれば、「生産性」対「劣等感」が発達課題であり、集団生活における他者との関係の中で自我が育まれていく時期である。乳幼児期からの発達の延長上にあり、青年期へと移行していく前段階にあたる。そのため、本研究ではこの発達の連続性という観点に立ち、幼児期及び青年期における知見も合わせて検討を行うことにしたい。児童期に焦点を当てて、死と生の理解について検討を行うことで、先述したように、命を大切にすることを教育実践する際に参考となる知見が得られ、その意義は大きいと思われる。

3. 本研究の目的

本研究では、児童期における死と生の理解に関して、発達の变化および関連する要因を扱った先行研究のレビューを行い、知見の整理をすること、さらに、命を大切にする教育の実践を考慮に入れた際に、今後の課題と考えられる点を挙げ、研究の方向性について新たな視点を提示することを目的とする。

なお、先行研究のレビューにあたっては、学問領域については心理学を中心とし、必要に応じて、教育学、看護学、精神医学、哲学、倫理学、宗教学といった近接領

域の文献を含めることにしたい。また、発達段階については基本的に児童期を対象とし、幼児期から青年期までの範囲を扱った文献を参照することにする。なお、これを踏まえて、生活年齢および学年が該当する発達段階をFig.2に示す。

II 死と生の理解の発達の变化および関連する要因に関する研究

1. 死と生の理解の発達の变化に関する研究

(1) 死の概念

子どもの死の理解については、認知的側面に焦点を当てた研究が盛んに行われており、「死の概念」として扱われている。

Nagy (1948 / 1973) は3～10歳児に面接調査を行い、子どもの死に関する見方を三つの発達段階に大別している。第一段階（5歳以下）では、通常、死を取り返し難いものだと受けとめておらず、死の中に生命を見ており、第二段階（5～9歳）では、死を擬人化することが多く、死を偶然の事件と考え、第三段階（9歳以上）では、死をある法則によって生起するプロセスであると考えという。また、Speece et al (1984) は、35本の論文をレビューし、死の概念を三要素、すなわち、不可逆性（irreversibility）（死んだ〇〇は生き返ることができない）、身体機能の停止（nonfunctionality）（死んだ〇〇は～することができない）、普遍性（universality）（〇〇は死ぬ）に分けて整理を行い、大部分の子ども達は、5～7歳の間で死の概念を獲得すると結論づけている。日本でも死の概念を扱った研究は数多く行われている。その知見としては、概して、幼児期から児童期中期にかけて、生物学的に正しい方向で、すなわち、死んだ〇〇は生き返ることができない、死んだ〇〇は～することができない、〇〇は死ぬという認識が進むことが明らかになっている。一方、児童期中期から青年期前期において、その認識に揺らぎが見られるか否かについては一致した結果が得られていない（常葉ら, 1979；東京都立教育研究所, 1983；上園, 1994；仲村, 1994；山岸ら, 1995；兵庫・

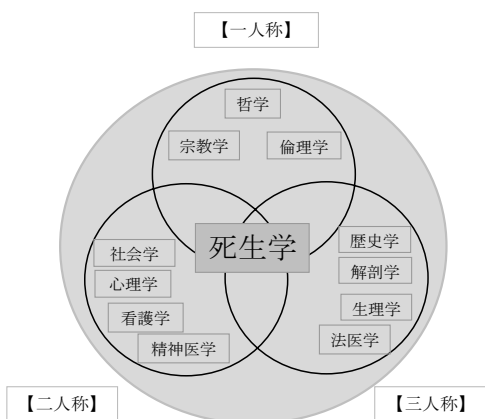


Fig.1 学問が主に取り扱う死の人称の違い

乳 児 期	幼 児 期						児 童 期						青 年 期									
							前 期		中 期		後 期		前 期			中 期			後 期			
							年 少	年 中	年 長	小 1	小 2	小 3	小 4	小 5	小 6	中 1	中 2	中 3	高 校	専門学校/短大		大 学
0 歳	1 歳	2 歳	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	13 歳	14 歳	15 歳	16 歳	17 歳	18 歳	19 歳	20 歳	21 歳	22 歳

Fig.2 本研究で扱う発達段階の範囲

生と死を考える会, 2003; 竹中ら, 2004; 兵庫・生と死を考える会, 2005; 長崎県教育委員会, 2005; 赤澤, 2006; 館野, 2009)。その他に, 死の原因については, 幼児期から児童期にかけて, 空想的なものから現実的なものへ, 外的なものから内的なものへと認識が進むことが見出されている(仲村, 1994; 岡田, 1998; 館野, 2009)。さらに, 死後観については, 児童期中期から児童期後期にかけて, 天国・地獄へ行く, 霊魂は残る, 生まれ変わるといった死後の世界を想像するようになることが示されている(東京都立教育研究所, 1983; 仲村, 1994; 赤澤, 2006; 館野, 2009)。一方で, 児童期中期から後期において, 死は無であるという認識が進むという知見も得られている(山岸ら, 1995; 館野, 2009)。

(2) 生命概念および生物概念

子どもの生の理解についても, 認知的側面に焦点を当てた研究が多く行われており, 生命概念(〇〇は生きている)と生物概念(〇〇は生物である)とは区別して捉えられている。

Piaget (1926/1955) は, 子どもの生物の理解の段階として, 第一段階: 全てのものに生命を認める時期(4~6歳), 第二段階: 全て動くものに生命を認める時期(6~8歳), 第三段階: 自己の力で運動するものに生命を認める時期(8~11歳), 第四段階: 動物だけに生命を認める時期(11歳以上)を示している。また, 幼児の思考が, アニミズム的であること, すなわち, 生命のないものに生命や意識を認めるという心理的特徴を持つとし, それを知的不成熟さの現れとして捉えた。それ以降の研究では, 素朴生物学¹⁾が成立する時期や発生メカニズムなどをめぐって様々な議論がなされ(例えば, Carey, 1985/1994; Hatano et al, 1994), 現在では, 子どもは生物に関して領域固有²⁾の知識体系を持ち, 幼児期の段階から素朴概念を有する存在として捉えられている(旦ら, 2005)。生命概念に関しては, 対象の違い(人間, 動物, 植物, 無生物)によって認識の様相が異なり(東京都立教育研究所, 1983; 多田納, 1992; 佐藤ら, 1999; 兵庫・生と死を考える会, 2003; 兵庫・生と死を考える会, 2005), その判断に用いられる属性も質的に変化していくこと(宮本ら, 1967; 堅田, 1974)が明らかになっている。また, 幼児に顕著な心理的特徴であると考えられてきたアニミズム傾向が児童期中期以降で再び見られるようになることも報告されている(東京都立教育研究所, 1983; 多田納, 1992; 佐藤ら, 1999)。その後の発達としては, 大学生において, 生物概念につ

いては, 科学的に正しい方法で, 生物と無生物が区別されるが, 生命概念については, 身体部位(爪, 髪の毛など)や自然現象(海, 山など)が生きていると認識されており, 生物概念よりも広い概念であることが示唆されている(布施, 2004)。

(3) 死や生に対する感情・イメージ

死や生に対する感情およびイメージについては, 自由連想法やSD法を用いてアプローチされている。まず, 自由連想法を用いた研究は, 死や生という言葉聞いてどんな言葉を思い浮かべるかについて対象者に尋ねるものである。児童期の死のイメージは, “小学生の方が中学生よりも死のイメージは感情的であり, 中学生で即物的になる”(東京都立教育研究所, 1983)ことが明らかとなっており, 感情項目が多く挙げられることが特徴的である(東京都立教育研究所, 1983; 上園, 1993; 森木, 2008)。その内訳としては, 嫌な, 悲しい, 怖いといったネガティブな感情が上位を占めることが示されている(東京都立教育研究所, 1983; 上園, 1993; 森木, 2008)。ただし, 「生」の連想語は“よい感じ”に17.6%, “いやな感じ”に1.7%が, 「死」の連想語は“よい感じ”に0.3%, “いやな感じ”に29.7%が分類されたことが示されている(森木, 2008)。また, 「死」の連想語として“おもしろそう”, “楽しそう”, “好奇心がわく”という肯定的な言葉があったことが報告されている(津野ら, 2002)。青年期前期以降においても, 「感情反応」(死に関連してわき上がる感情に言及した反応)や「死の形容」(死を形容するイメージに言及した反応)に, ネガティブな側面とポジティブな側面の両方が見られたことが示されている(丹下, 2002)。次に, SD法を用いた研究は, 対象者に相反する形容詞対を評定してもらい, 死や生のイメージを測定するものである。山岸ら(1995)は, 「死」のイメージとして, 小学3年生および5年生では, 大半の者が, 暗い, 怖い, 寒いイメージを持ち, 共通したイメージとなっているが, 3年生は“汚い”, “低い”, 5年生は“きれいな”, “高い”イメージを持ち, 学年でイメージが異なることを明らかにしている。また, 松下ら(2007)は, 大学生では, 全体的に死はネガティブなイメージ, 生はポジティブなイメージで捉えられることを示している。

(4) 死や生に対する態度

児童期においては, 自殺や他殺に対する態度, 生物に関わる態度に関する研究がいくつか行われている。自殺や他殺に対する態度は, 児童期後期から青年期前期にかけて, 自殺や他殺を否定しなくなり, 許容する態度が見られることなどが示されている(東京都立教育研究所, 1983; 兵庫・生と死を考える会, 2005)。また, 生物に関わる態度は, 児童期から青年期後期へと発達段階が進むにつれて, 生命の危機に瀕している動物を助けようと

¹⁾ 素朴生物学 (native biology) ...経験を通じて自然発生的に獲得される生物に関する知識体系。

²⁾ 領域固有 (domain specificity) ...子どもの思考は, 一般的な操作段階ではなく, その領域 (課題内容) に依存して行われるという性質。

する意識は弱まり、動物が他の生物を捕食する行為を認めるようになることなどが明らかになっている(加藤ら, 1996)。また、殺生行動の認識は、小学生では生物の種類によって、中学生以上では殺生の目的によって因子が分かれる傾向があり(石井ら, 2007)、教員と比較して学生は殺生行動を反対とする傾向が強いことが示されている(三浦ら, 2007)。青年期以降では、死に対する態度は, Templer (1970) をはじめとして、死に対する不安や恐怖といったネガティブな側面を中心に検討が進められてきた。近年では、ネガティブな側面だけではなく、ポジティブな側面も含めて多面的に理解されるようになってきている(例えば、丹下, 1999; 平井ら, 2000, 石坂 2009 a)。青年期前期では、学年が上がるにつれて、概して、死に対する否定的な態度が減少すると共に、生に対する積極的な態度が減少することが報告されている(丹下, 2004)。

(5) 死と生とのつながり

死と生とのつながりについては、対象者に死と生のテーマで絵を描くことを求め、説明を加えてもらう描画法を用いて検討されている。相良(2009)は、7~12歳児では、生と死の関係性は正反対ではあるがつながっているものとして捉えられていること、生と死の意味は経験に基づいた具現化した意味として受け取られていることを明らかにしている。青年期後期では、この世とあの世のイメージ画、たましいの往来イメージ画(やまだら, 1998)、人生のイメージ画(やまだ, 2002)が用いられ、やまだ(2008)は“あの世やたましいのイメージは、人のいのちのつながりを長いサイクルで循環的にむすぶ機能をもつ”と述べている。

(6) その他

死と生の理解に関する先行研究は、そのほとんどが横断的研究であるが、事例を縦断的に検討した研究もある。清水(1991, 1992)は、死生観の形成過程について、幼児期から青年期中期までの約15年間にわたる記録をもとに、自己意識の発達過程との関係から考察を行っている。

2. 死と生の理解に関連する要因に関する研究

(1) 性差

死の概念については性差の検討を行っていない研究が多く(例えば、仲村, 1994; 山岸ら, 1995; 赤澤, 2006など)、性別を考慮した研究でも明確な差はほとんど見られない結果となっている(例えば、常葉ら, 1979; 東京都立教育研究所, 1983; 兵庫・生と死を考える会, 2005など)。一方で、男子よりも女子の方が、魂の存在や死後の世界を肯定する割合が高いことを示した研究もある(東京都立教育研究所, 1983; 金子ら, 1995)。生命概念については、アニミズム傾向が男子よりも女子の

方に多く見られることが示されている(東京都立教育研究所, 1983; 佐藤ら, 1999)。また、死のイメージも、女子の方が感情的に捉えているのに対して、男子は即物的なイメージが強いことが明らかになっている(東京都立教育研究所, 1983)。さらに、生命の危機に瀕している動物を助けようとする態度や動物の虐待と利用をよくないとする態度は男子よりも女子に強いという結果が得られている(加藤ら, 1996)。自殺に対する態度では、児童期中期から青年期前期において、男子よりも女子の方が“自殺をする人の気持ちがわかる気がする”と回答した割合が高く、特に、中学2~3年生において約50~60%が共感的に受けとめていることが明らかにされている(東京都立教育研究所, 1983)。

(2) 自尊感情及び自我の発達

自尊感情については、“自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚—感情”(遠藤, 1992)と定義され、従来から精神的健康や社会適応の基盤をなす重要な概念として扱われてきた。児童期後期から青年期前期では、自己肯定感が高い群、すなわち、“自分自身が好きだ”と回答した群では“死にたいと思ったことがある”頻度が少ないことが報告されている(兵庫・生と死を考える会, 2005)。また、青年期前期では、自尊感情が高い群では“何でも相談したり、信頼できる友達がいる”、“自分が死んだら親や兄弟が悲しむと思う”と回答した割合が高いことなどが明らかにされている(小幡ら, 2000)。さらに、青年期後期では、自尊感情が高い群の方が“生まれてきて良かったと思う”と回答し、自尊感情が低い群の方が“自分の死について考えることがよくある”と回答する傾向があることが示されている(鈴木ら, 2006)。自我の発達については、青年期中期以降において、概して、自我が発達しているほど、人生において死の持つ意味を肯定的に捉え、生きることに意欲的であり、死後の生活が存在すると考えること、一方、自我が発達していないほど、死を苦しみからの解放とみなし、死を未知で虚無なものと感じることなどが、いくつかの研究から明らかになっている(丹下, 1995; 森田, 2007; 松元, 2008; 石坂, 2009b)。

(3) パーソナリティ

共感性

共感性は、“他者の経験についてある個人が抱く反応を扱う一組の構成概念”(Davis, 1994/1999)と定義され、向社会的行動を規定する要因と考えられている。前原ら(2008)は、死に関する経験による人格の発達と共感性との関連について検討を行い、概して、大学生では、共感性の高さは、生と死の意味を考えるという人格の発達に正の影響を与えることを明らかにしている。川守田ら(2002)は、死に対する態度と共感性との関係について検討を行い、看護学生では、不幸な他者に対して同情

や哀れみの感情を経験するほど、人生に対して死が持つ意味を認め、死を軽視せず、死後の生活の存在を信じることを示している。

攻撃性

攻撃性は、“他の個体に対して危害を加えようと意図された行動を起こす内的過程”と定義される（大淵，1999）。内田ら（1989）は、小学5年生と中学2年生を対象に、死および自殺に対する意識と攻撃性との関連を検討し、破壊的な意図を持つ攻撃性が高い群では、死を生からの単なる離脱や別離であり、死を生とは全く無縁なものと位置づける割合が高いこと、また、死への願望が強く、他者の自殺を美化し、そのスリルや快楽に関心を向け、許容する割合が高いことを明らかにしている。

(4) 個人の経験

自身が病気を患う体験

岡田ら（1988）は、4～12歳児の予後不良患児と慢性疾患患児では、生物・無生物の識別の根拠として、少数ではあるが入院経験が反映された内容が見られること、先行研究との比較から、健康児よりも死の普遍性や死後の世界を認識する時期が早いことなどを明らかにしている。また、杉本（2001）は、3～15歳の慢性疾患患児と健康児との比較では、死の衝動を覚えたことがある子どもは慢性疾患患児に多く、特に12～15歳の年齢群で顕著であり、病気に関することが多いという特徴があることを明らかにしている。さらに、杉本ら（2004）は、3～15歳の慢性疾患患児は健康児と比較して、概して、死の概念を理解する時期が早く、特に幼児期において、身体機能の停止を理解している割合が高いことを示している。

生物を飼育する体験・生物との死別体験

佐藤ら（1999）は、児童期前期から中期では、ペットの飼育経験を有する子どもの方が、死の普遍性を認識している割合が高いこと、身近な人やペットとの死別経験を有する子どもの方が、死の普遍性を認識している割合が高いことを示している。また、石井ら（2008）は、児童期後期では、身近な生き物と野生動物の殺生行動に対して、ペットの飼育体験はマイナスの効果を持つことを明らかにしている。さらに、児童期後期から青年期前期では、ペットとの死別経験がある群の方が、死の普遍性を認識している割合が高いこと（兵庫・生と死を考える会，2005）、動物との死別体験を持っている子どもは、自殺を否定する割合が高いこと（東京都立教育研究所，1983）が示されている。

身近な他者との死別体験

仲村（1994）は、6～8歳の年齢群では、家族や親戚などとの死別体験がある群の方が、死後の世界や靈魂の存在を考え、想像的に捉える割合が高いことを明らかにしている。また、木村ら（1990）は、小学5～6年生で

は、身近な人との死別体験がある群の方がいない群と比較して、死の不安・恐怖が高いことを明らかにしている。青年期前期以降では、殺生意識が希薄な殺生行動に対して身近な死の体験が負の影響を与えること（石井ら，2008）、家族や親友の死を経験した人は発達に伴い、生きることの意欲的なること（丹下，1995）、友人との死別体験がある群の方が、死をより虚無と感じていること（松元，2008）、同居者との死別体験がある群では、死の操作や人工妊娠中絶といった生命操作の許容度が低い傾向があること（金児，2006）が明らかとなっている。

墓参り・葬儀の経験

兵庫・生と死を考える会（2005）は、児童期前期および中期では、葬儀の経験がある群では、死の普遍性を認識している割合が高く、墓参りの経験がある群では、死の不可逆性を認識している割合が高いこと、児童期後期および青年期前期では、葬儀の経験がある群では、死の普遍性を認識している割合が高い傾向があり、墓参りの経験がある群では、死の普遍性を認識している割合が高い傾向があること報告している。一方で、死の概念と死んだ人を見た経験（常葉ら，1979）、死後観と葬儀の経験（館野，2009）には関連が見られなかったという研究もある。また、青年期後期では、葬式に参加した体験が多いほど、生へ執着する態度が高い傾向があることが明らかにされている（金児，2006）。

家庭環境

家族で死について話すことがない群では、死について話すことと嫌な気持ちになると回答した割合が高いこと（館野，2009）、祖父母と同居している子どもは、核家族家庭の子どもと比べて、死後に“天国や地獄へ行く”、“神様や仏様の所へ行く”と回答した割合が高いこと（佐藤ら，1999）が示されている。兵庫・生と死を考える会（2005）は、児童期前期から青年期前期では、家族と死の話をしたことがある群では、死の普遍性を認識している割合が高い傾向があること、“自分の誕生日を家族に覚えてもらっていない”と回答した群では、死の普遍性を認識している割合が低い傾向があることを示している。

テレビゲーム体験

子どもはテレビゲーム上と現実世界の死を区別して考えていることが、いくつかの研究により示唆されている（佐藤ら，1999；館野，2009）。例えば、佐藤ら（1999）は、児童期前期および中期では、テレビゲーム上の死における再生願望と現実社会での再生願望の間には、有意な関連が認められなかったことを示している。一方で、テレビゲームが子どもの死の理解に望ましくない影響を与えることが、いくつかの研究により指摘されている（兵庫・生と死を考える会，2005；長崎県教育委員会，2005；石井ら，2008）。例えば、兵庫・生と死を考える会（2005）は、児童期前期および中期では、テレビゲー

ムをする時間が一日3時間以上である群で、児童期後期および青年期前期では、興味を持ってテレビの暴力・殺人シーンを見る群、“殴ったり殺したりするゲームをする”と回答した群で、死の普遍性や不可逆性を認識している割合が低いことを報告している。

(5) 文化・宗教的背景

杉本(1996)は、3~12歳児の描画から、キリスト教的背景をもつ子ども達は、天国を神様やイエス様のいる所として明るいイメージで捉えるが、それ以外の子ども達は、死後の世界を現実的でやや殺風景なイメージで捉えることを示している。また、相良(2004)は、ミッションスクールに通う7~12歳児の描画から、仏教、神道、キリスト教など複数の宗教観が混合した考えをもっていることを明らかにしている。その他、青年期中期以降では、死に対する態度と信仰の関連について、信仰がある人は、自殺を否定し、状況の如何を問わず生きること自体を目的と考えること(丹下, 1995)、死への恐怖や不安を軽減し、死の肯定的な受容が可能となること(隈部, 2003)、死を人生の試練と受けとめる態度は、仏壇と神棚のある家庭に強く見られること(金児, 1993)が示されている。

Ⅲ 臨床心理学の立場から死と生を理解する視点

1. 死と生の多側面的・多層的な理解

先述してきたように、死と生の理解を扱った研究は、認知的側面に焦点を当てて、死の概念や生命概念という枠組みからアプローチされたものが多かった。一方で、情緒的側面を中心に扱った死や生に対する感情・イメージ、行動的側面を視野に入れた死や生に対する態度に着目した研究は比較的少ないと言える。各々の側面に関する課題としては、まず、認知的側面については、データの分析が記述統計に留まる研究が多いため、今後は、実証的な検討を行った知見を得ることが重要である。次に、情緒的側面については、児童期の死と生の理解の一つの特徴として、感情的な反応が多く見られるという知見を考慮すれば、詳細に検討することは意義深いことであると思われる。ただし、ネガティブな感情に直面化させる可能性が高いため、調査にあたっては、細心の倫理的配慮を行うことが求められるだろう。最後に、行動的側面については、行動に影響を及ぼすとされる態度を測定したものが大半であり、実際の行動とは隔たりがあると考えられるため、観察法を採用するなど研究方法を工夫することが望ましい。以上の課題を踏まえ、今後は、児童期における死と生の理解について、様々な側面から多層的に把握する必要があると考えられる (Fig.3)。

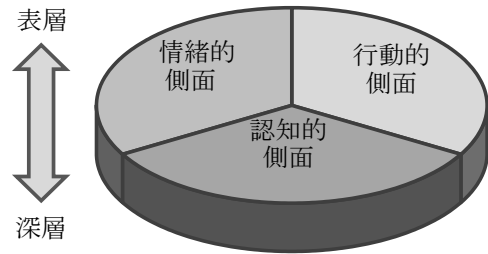


Fig.3 死と生の理解の様相

2. 「いのち」という言葉への着目

児童期における死と生の理解は、欧米の研究の流れを汲み、死の概念や生命概念といった視点から研究が積み重ねられてきた。これは、文化差を検討できるという有益な枠組みであるが、一方で、日本独自の死と生の理解のありようを見落としてしまう危険も潜んでいると思われる。そこで、「いのち」という言葉に着目することを提案したい。「いのち」とは、身体的、精神的、社会的側面から成り(鈴木, 2005; 近藤, 2007)、生と死の両方を含む概念であると整理されている(上園, 1997; 近藤, 2007)。また、「いのち」は日本人が古来より特別な含意を読みとってきた和語であることが指摘されている(鎌田, 1991)。こうした経緯を反映してか、現在でも、日常生活において頻繁に使用される馴染み深い言葉となっている。いのちという言葉に着目することで、より深層にある日本人の心性を把握することができるのではないかと考えられる。

3. 死と生の理解に関連する要因の包括的な検討

死と生の理解に関連する要因としては、自身が病気を患う体験、生物を飼育する体験・生物との死別体験、身近な他者との死別体験、家庭環境、テレビゲーム体験などについては、児童期における研究がいくつか存在し、議論がなされている。一方で、自尊感情、共感性、攻撃性、文化・宗教的背景などについては、児童期における研究はほとんど無く、今後の研究が待たれる状況にある。特に、自尊感情や共感性を高めることは、いのちの教育を実施する上で具体的な目標とされているものであり(近藤, 2007)、その関連について詳細に検討していく必要があるだろう。また、このような一般的に好ましいと思われる特性だけでなく、攻撃性など一般的に好ましくないと思われる特性との関連をみることで、子どもの死と生の理解の様相を立体的に把握することが可能となり、知見が深まっていくのではないかと考えられる。

IV 結論と今後の課題

本研究は、児童期における死と生の理解に関する先行研究のレビューを行い、発達の変化および関連する要因という視点から、知見の整理を行った。今後の研究の方向性としては、死と生の理解を様々な側面から多層的に把握すること、「いのち」という言葉に着目すること、死と生の理解に関連する要因を包括的に検討することが重要であると考えられた。

本研究の課題としては、死の概念及び生命概念、死や生に対する感情・イメージ、死に対する態度が、相互にどのような関係にあるのかについて整理を行っていない点が挙げられる。今後は、それらの関連をみた先行研究をレビューし、死と生の理解について総合的に捉えていく必要があるだろう。

< 付 記 >

論文の作成にあたり、ご指導いただきました、九州大学高等教育開発推進センターの吉良安之教授、九州大学大学院人間環境学研究院の野島一彦教授に心より御礼申し上げます。

引用文献

- 赤澤正人 (2006)：児童の死の概念に関する研究 臨床死生学, 11, 24-33.
- Carey S (1985)：Conceptual differences between children and adults. Cambridge, MA: MITPRESS. 小島康次・小林好和 (訳) (1994)：子どもは小さな科学者がミネルヴァ書房
- 旦 直子 (2005)：思考の中核領域としての素朴生物学 稲垣佳世子・波多野誼余夫 (著・監訳) 子どもの概念発達と変化：素朴生物学をめぐって 共立出版 pp 2-20.
- Davis MH (1994)：Empathy. A social psychological approach. Westview Press. 菊池章夫 (訳) (1999)：共感の社会心理学 川島書店
- デーケン A (1986)：< 叢書 > 死への準備教育第一巻 死を教える アルフォンス・デーケン (編) メヂカルフレンド社 pp 1-63.
- デーケン A (1996)：死とどう向き合うか NHK ライブラリー
- 遠藤辰雄 (1992)：セルフ・エスティーム研究の視座 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽 (編) セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求— ナカニシヤ出版 pp 8-25.
- Erikson EH (1959)：Psychological issues identity and the life cycle. International University Press. 小此木啓吾・小川捷之・岩男寿美子 (訳) (1973)：自我同一性—アイデンティティとライフサイクル 誠信書房
- 布施光代 (2004)：生物概念と生命概念の階層構造 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 51, 215-222.
- Hatano G & Inagaki K (1994)：Young children's native theory of biology. Cognition, 50, 171-188.
- 平井 啓・坂口幸弘・安部幸志・森川優子・柏木哲夫 (2000)：死生観に関する研究—死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証— 死の臨床, 23(1), 71-76.
- 平山正実 (1991)：死生学とはなにか 日本評論社
- 平山正実 (2000)：死生学 河野友信・平山正実 (編) 臨床死生学事典 日本評論社 pp 2-3.
- 兵庫・生と死を考える会 (2003)：幼児・児童の死生観についての発達段階に関する意識調査 (財) 21 世紀ヒューマンケア研究機構平成 15 年度助成研究報告
- 兵庫・生と死を考える会 (2005)：子どもの成長に寄与する「いのち」の教育のあり方：(子どもの死生観についての発達段階に関する意識調査) http://www.hyogo-c.ed.jp/~inochi/pdf/2005_1.pdf 2009 年 8 月 18 日
- 兵庫・生と死を考える会 (2007)：子どもたちに伝える命の学び 東京書籍
- 石井正子・三浦香苗 (2007)：殺傷行動に関する認識の発達—殺傷行動項目の因子分析を通して— 昭和女子大学学苑・人間社会学部紀要, 796, 78-89.
- 石井正子・三浦香苗 (2008)：殺生行動に影響を与える生活体験と価値観—小学生と中学生での関与の違い— 昭和女子大学学苑・人間社会学部紀要, 808, 62-73.
- 石坂昌子 (2009a)：死の意味づけ尺度作成の試み 心理臨床学研究, 26(6), 734-740.
- 石坂昌子 (2009b)：死の意味づけと自我同一性の関連 健康支援, 11(2), 17-26.
- 鎌田東二 (1991)：日本人の深層的な生死観—「いのち」と「たましひ」をめぐって 多田富雄・河合隼雄 (編) 生と死の様式—脳死時代を迎える日本人の死生観 誠信書房 pp 169-184.
- 上園恒太郎 (1993)：子どもの死の意識における感情表出年齢と道徳教育 長崎大学教育学部教育科学研究報告, 45, 11-25.
- 上園恒太郎 (1994)：子どもの死の判断における年齢ごとのカテゴリーの類似性 長崎大学教育学部教育科学研究報告, 47, 1-13.
- 上園恒太郎 (1997)：いのちの大切さをどう教えるか—子どもの死の意識といのちの教育— 教育学研究, 64(1) 19-23.
- 金子政雄・中村雅治・長沢宏明 (1995)：「いのち」に関

- する小学生の意識調査 生物教育, 35(1), 169-174.
- 金児 恵 (2006): 家族やペットとの死別体験が死観・宗教観・生命観に及ぼす影響 次世代死生学論集 次世代死生学論集編集委員会 (編) 東京大学 21 世紀 COE プログラム「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」 pp 233-241.
- 金児曉嗣 (1993): 現代家族の孤独と死生観 社会心理学研究, 8(3), 159-169.
- 館野知都 (2009): 児童の死の概念 作新学院大学人間文化学部紀要, 7, 81-96.
- 堅田弥生 (1974): 幼児・児童における生命概念の発達 その一—生命認識の手がかりとその変化— 教育心理学研究, 22(1), 31-39.
- 加藤佳子・瀬戸武司 (1996): 小学校における生命を尊重する態度の育成に関する基礎的研究 生物教育, 36(1), 2-11.
- 川守田千秋・岡岡たま代 (2002): 看護学生の共感性と死に対する態度との関係—2 年課程の学生を対象として— 神奈川県立衛生短期大学紀要, 35, 15-21.
- 警察庁生活安全局生活安全企画課 (2010a): 平成 21 年中における自殺の概要資料
http://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/220513_H21jisatsunogaiyou.pdf 2010 年 8 月 30 日
- 警察庁 (2010b): 平成 21 年の犯罪情勢
<http://www.npa.go.jp/toukei/seianki8/h21hanzaizyousei.pdf> 2010 年 9 月 7 日
- 木村正治・錦井利臣・中川保敬・坂下玲子 (1990): 小学生の死に対する態度と死の不安・恐怖の関連性についての一考察 保健の科学, 32(11), 777-781.
- 小幡セイ・入谷仁士・木村龍雄 (2000): 中学生の「生」と「死」の意識に関する研究 高知大学教育学部研究報告 第一部, 59, 13-35.
- 近藤 卓 (2003): いのちの教育とは何か 近藤 卓 (編) いのちの教育 はじめる・深める・授業のてびき 実業之日本社
- 近藤 卓 (2007): いのちの教育の基本的考え方 近藤 卓 (編) いのちの教育の理論と実践 金子書房 pp 8-19.
- 隈部知更 (2003): DAP-R 日本語版内容的妥当性: 死への態度と信仰の関係 心理臨床学研究, 20(6), 601-607.
- 前原佳奈・橘川真彦 (2008): 大学生の死に関する経験による人格の発達—共感性・死に対する態度の視点から— 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 31, 293-300.
- 松元千草 (2008): 青年期における自我発達と死生観形成過程との関連 山梨英和大学心理臨床センター紀要, 4, 17-31.
- 松下姫歌・尾方 綾 (2007): 青年期における死の不安と「死」・「生」・「自己」のイメージ—DAS と SD 法を用いて— 広島大学心理学研究, 7, 325-337.
- 三浦香苗・田中千穂・石井正子 (2007): 殺傷行動に関する認識の発達 —具体的殺傷場面への賛否と判断理由の分析— 昭和女子大学学苑・人間社会学部紀要, 796, 67-77.
- 宮本美沙子・田部洋子・吉田薩子・東 洋 (1967): 児童の生命概念とその手がかりの発達 教育心理学研究 15(2), 85—91.
- 文部科学省 (2004): 児童生徒の問題行動対策重点プログラム (最終まとめ)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/10/04100501/001.htm 2009 年 6 月 28 日
- 森木朋佳 (2008): 小学生が持つ生や死についてのイメージに関する一考察—自由記述式の質問紙調査に基づいて— 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, 38, 135-146.
- 森田真季 (2007): 死生観とアイデンティティ, ストレッサー, コーピングとの関連 心理臨床学研究, 25(5), 505-515.
- 長崎県教育委員会 (2005): 児童生徒の「生と死」のイメージに関する意識調査
<http://www.pref.nagasaki.jp/edu/gikai/contents/teirei200501/isikityosa.pdf#search=長崎県教育委員会生と死> 2009 年 7 月 5 日
- Nagy M (1948): The child's theories concerning death. Journal of Genetic Psychology, 73, 3-27. 大原健士郎・勝俣僕史・本間 修 (訳) (1973): 死の意味するもの 岩崎学術出版社 pp 80-101.
- 仲村照子 (1994): 子どもの死の概念 発達心理学研究, 5(1), 61-71.
- 小淵憲一 (1999): 攻撃 / 攻撃性 心理学辞典 有斐閣 pp243-244.
- 岡田洋子・松浦和代・木原キヨ子 (1988): 病児の「生と死」に関する意識調査 小児看護 11(11), 1523-1533.
- 岡田洋子 (1998): 子どもの死の概念 小児看護, 21(1), 1445-1452.
- Piaget J (1926): La représentation du monde chez l'enfant. Geneve: Institut J.-J. ROUSSEAU. 大伴 茂 (訳) (1955): 児童の世界観 同文書院
- 相良ローゼンマイヤー—みはる (2004): 子どもの死と死後の世界観: 解釈学的現象学を用いて 日本看護科学会誌, 24(4), 13-21.
- 相良ローゼンマイヤー—みはる (2009): 日本の子ども達の把握している生と死の意味 現代のエスプリ 499 いのちの教育の考え方と実際 近藤卓 (編)

- 31—43.
- 佐藤比登美・齊藤小雪 (1999)：現代の子どもの死の意識に関する研究 小児保健研究, 58(4), 515-526.
- 島園 進 (2008)：死生学とは何か 日本での形成を顧みて 島園 進・竹内整一 (編) 死生学 1：死生学とは何か 東京大学出版会 pp 9-30.
- 清水美智子 (1991)：子どもは生と死をどのように認識していくか (1) —発達人間学の課題としての死生観の探究— 大阪教育大学紀要 第 部門, 40(1), 85-99.
- 清水美智子 (1992)：子どもは生と死をどのように認識していくか (2) —発達人間学の課題としての死生観の探究— 大阪教育大学紀要 第 部門, 40(2), 255-272.
- Speece MW & Brent SB (1984)：Children's understanding of death: a review of three components of a death concept. Child development, 55, 1671-1686.
- 杉本玲子 (1996)：子どもの死生観と宗教心 青山学院女子短期大学総合文化研究所年報, 4, 23-39.
- 杉本陽子 (2001)：慢性疾患患児と健康児の「生きている実感」と「死の衝動」 発達人間学論叢, 4, 37-52.
- 杉本陽子・宮崎たつ子 (2004)：慢性疾患患児と健康児の「死の概念」—「普遍性」「体の機能の停止」「非可逆性」「死の原因」に対する認識— 小児保健研究, 63(3), 286-294.
- 鈴木真由子・池田智美・岡本正子 (2006)：大学生の死生観と自尊感情 生活文化研究, 46, 29-41.
- 鈴木康明 (2005)：学校におけるいのちの教育の現状と課題 児童心理, 819, 18-24.
- 多田納育子 (1992)：児童の生命観の発達に関する研究 生物教育, 32(4), 253-261.
- 竹中和子・藤田アヤ・尾前優子 (2004)：幼児の死の概念 看護学総合研究, 5(2), 24-30.
- 丹下智香子 (1995)：死生観の展開 名古屋大学教育学部紀要, 42, 149-156.
- 丹下智香子 (1999)：青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, 70(4), 327-332.
- 丹下智香子 (2002)：死からの連想語の KJ 法による分類—死生観の構造の検討— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 49, 157-168.
- 丹下智香子 (2004)：青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究, 15(1), 65-76.
- Templer DI (1970)：The construction and validation of a death anxiety scale. Journal of General Psychology, 82(2), 165-177.
- 津野博美・石橋尚子 (2002)：子どもの生と死の認識といのちの教育 子ども社会研究, 8, 23-39.
- 常葉恵子・伊東和子・岡田洋子・岡堂哲雄 (1979)：児童期における死の概念の発達 聖路加看護大学紀要, 6, 31-41.
- 東京都立教育研究所 (1983)：子供の「生と死」に関する意識の研究 東京都立教育研究所相談部児童生徒研究室
- 内田 篤・吉田昭久 (1989)：児童・生徒の「死」および「自殺」に対する意識と攻撃性との関連 茨城大学教育学部教育研究所紀要, 21, 123-139.
- やまだようこ・加藤義信 (1998)：イメージ画にみる他界の表象—この世とあの世の位置関係— 京都大学教育学部紀要, 44, 86-111.
- やまだようこ (2002)：Models of Life-span Developmental Psychology: A Construction of the Generative Life Cycle Model Including the Concept of Death. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 48, 39-62.
- やまだようこ (2008)：魂のイメージと循環するいのち 武川正吾・西平 直 (編) 死生学 3：ライフサイクルと死 東京大学出版会 pp175-196.
- 山岸明子・森川由美子 (1995)：子どもの死の概念の発達—認知発達による変化と大人への同化の観点から— 順天堂医療短期大学紀要, 6, 66-75.